

小島直子、おそろべし!!!!!!

「シルク入りの超お気に入りのカーテンをピシッと閉めておかなかったから、ほんのわずかな隙間から、迷惑な朝日がさわやかに指し込んできた。5時29分。真っ暗な部屋に透明な一条の光。この光のビーム光線に…」

鮮やかな光景で本書は始まる。

著者は、出生時の酸素不足によって脳性小児マヒになり、移動、更衣、排泄、入浴などに介護を要する。

最初養護学校に通い、小学校低学年で自ら希望して普通校へ移った。

日本福祉大学に入学後は、両親から離れて生活を始めた。

先のことを考えると、自立して生活できることが必要であった。そのためには、介護を支える人の体制や住環境が必要であった。著者は、自らの工夫と周囲の支えで課題をひとつずつ解決していった。

東京に戻った今も、交替で介護する関係者に支えられ、自立して暮らしている。

自立は著者の半生と本書の大きなテーマである。

「身体機能を向上させ、何もかもひとりでできるようになることが自立。

『できないこと』を、どんな手段を使っても、『できること』に変えていくことが、自立。ずっと、そう思っていた。

ところがある日、隣に住んでいた車いすの先輩に忠告された。

『今1時間かけて靴下がはけたとしても疲れるし、他のいろんなことに時間がかけられないでしょ。もし誰かの手を借りてそれが30秒で終われば、残りの59分30秒は自分の時間に使えるのよ。好きな本を読んだり、口紅をつける時間にね』気持ちが楽になった。

それ以来、化粧や歯磨きのように“どうしてもひとりでやりたいこと”と、着替えや入浴のように、“誰かの手を借りること”を組み合わせ能率よくコントロールできるようになる。」

こうして、著者なりの自立を見つけていく。

“技術”も必要だ。「目ざまし時計が鳴ってから、玄関を出るまでの約1時間。友達といっしょに玄関を出る朝は、サバイバルだ。1分が勝負で、指示を出すときは、1秒でも時間を無駄にしないようにと、自分の行動を頭の中で整理する。

また、ひとりひとりの洗面や化粧にかかる時間を計算しつつ、相手の行動パターンやスピードなども加算して、行動順序を組み替えたりもする。

“女性”としての著者もいる。

「次は眉の調整。本物に偽物を描き足して仕上げる。

女って怖い、ウフッ！と思いつつも、上出来な仕上がりにうっとりする毎朝である。目はチャームポイントだから、さらに手を加えていく。パールのシャドウにブルーのアイカラー。そしてたまに刺さっちゃって痛い思いをするマスカラ専用ブラシで整えて、嘘に嘘を重ねる。」

「仕上げのドライヤーは、命の次に大事な前髪だけでOK！後ろ髪はどんなに跳ねていても、ヘアワックスという強い味方くんがいる。すべてが完了したとき、鏡に向かって、笑顔で大きくうなずいてしまう自分が、今日も好きだ。」

街並みの整備された米パークレーを訪れる機会があった。

「『するい！』 そう感じたのは、その日の夜だった。いつもは1日100回以上言っている”ありがとう”の言葉が、今日は何回言ったか数えられるかも知れない。ベッドに入ってから、それはなぜだろうかと考える。ハード面の整備を行えば、もっと気楽に外へ出られるようになるのではないか。ここでは”ありがとう”を言わなくても、どこへだって自由に歩ける環境がある。」

本書には、日常生活、生い立ち、事態に直面して感じることなど、著者の目に映るいまの社会が描かれている。

冒頭の描写は、目がさめる→おしっこがしたくなる→介助者は寝ている→起こしたくない→がまんする→がまんが限界になる…という展開へつながる。

トイレの問題は外出、仕事、デート、介護者の体制などを制約することになる。その対策として、何日か前から食事や水分の工夫を要することになる。

本書の題名は、ここから来ている。

正義感、科学的思考、負けずぎらい、トシの割にやんちゃ、明るい…、本書からは、著者の魅力的な性格が伝わってくる。

「おかしいんじゃないか」「なぜだろう」「一言ゆうたらんかい」…読者が思うことは、著者本人がより大きなアンテナで感じている。

それを真っ向から見つめ、けれん味なく行動に変えていく。痛快。また、読者に「そういうところ、私にもある！」と、気づかなかった自分をも発見させてくれる。

著者にインタビューを試みた。

曰く「①説教的に言うより、自分の生きてきたことを話すことで感じる人がやってくれる。②負けずぎらいで、分からないことをそのままにしないところは確かにある。社会的不利の現実から逃げなかった、逃げようがなかった。社会の裏側や人の本心を見てきた。伝えるのは自分の役割。③読者に『私』になってもらいたかった。自分と同じ、と感じてほしかった。そして障害を疑似体験する。そのため、なるべく”私”という言葉を使わなかった（私と書くと、読者は著者と距離をおいてしまう）。」

ことば、作品はメッセージを伝える。読者の心を動かし、行動を変え、生き方を変える。本書にはそれがある。著者はそれを「設計」して実現している。

読後にぼんやり感じていたコジマあなどれず、は、コジマ恐るべしに変わった。

後藤芳一 内閣府 障害者政策委員会 委員

日本福祉大学 大学院 医療・福祉マネジメント研究科 客員教授（「バリアフリー社会と新産業創出」担当）

書名：「口からウンチが出るように手術してください」

鉄身協「リハビリテーション」NO.438（01年11月）号より

（本文から引用した部分は、縮めるため一部表現を修正しました。）

（コモンズ 定価本体一、七〇〇円）